

いチョムスキー氏の姿を目の当たりにし、生成文法の創始者であるチョムスキーのすごさを改めて実感させられた。



写真2 チョムスキー氏のオフィスで
(このたび、チョムスキー氏に写真の
掲載許可をいただいた)

5. まとめ

以上、一年間のMIT滞在期間に印象的であった事柄について書き記した。一年は本当に短くあっという間だった。「もう一年MITで研究したかった」というのが本音だが、もちろんそんなことは許されるわけもない。しかし冒頭に記したとおり、このような貴重な一年を過ごさせてくれた愛知大学に本当に感謝している。また、MITでお世話になった教授陣、とりわけProf. Shigeru Miyagawa, Prof. Norvin Richards, Prof. Danny Fox、そしてHarvardのProf. James C.-T. Huang、およびMITの大学院生にもたいへん感謝している。

MITがあるケンブリッジ (Cambridge) はボストン (Boston) の中心部から近く、中心部から地下鉄で行くことができる。また地下鉄でさらに2駅北へ行けば、Humanities (人文科学) の研究で有名なHarvard Universityに行くことができる。ぜひ学生諸君もボストンに行く機会があれば、ケンブリッジまで足を延ばして、MITおよびHarvardのキャンパスを訪れていただき、日本の大学とのキャンパスの雰囲気の違いを肌で感じるとともに、カフェテリアでランチでも食べながら、アメリカの大学生・大学院生の様子を垣間見ていただきたい。

明治は遠くなりになり

－言葉の旅－

‘働くこと’と‘休むこと’の意味(補1)

経済学部 葛谷 登

1968年は明治百年の年でした。それは水俣病の原因が厚生省により発表され、東大入試の中止が決定され、プラハの春の花が咲いたかと思うと散った年でもあります(岩波書店『日本史年表増補版』320～321頁)。そして今年、2012年は明治百五十年まであと6年というところまで来ています。振り返れば、明治は益々遠い過去の世界になろうとしています。今や先進国の日本は経済競争において世界の先頭集団を走っています。最早、国内には日本が近代化を遂げたことを疑う人は少ないかも知れません。生活はコンピューターによって高度にシステム化され、一見快適な日常を生きていることが可能な世の中となりました。大量の資源と大量のエネルギーを消費して大量の財を生産した挙句、その生産物を大量に消費させられる時代になりました。資本主義社会は高度に発達し、日本の近代化は完成されたように見えます。法令順守 (compliance) が強く求められる今日では、世界標準は細分化と具体化の一途を辿り、個人が主体的な判断をもって倫理的に行動する余地がどんどん狭まって行くように見えます。

日本が米国と英国並びに中国に敗れた1945年8月15日以降から池田内閣により所得倍增計画が決定された1960年12月27日以前までは様相を異にしました。圧倒的な物量の前に米国に敗北を喫したという反省から生産力をいかに発展させるか、言い換えればいかに綻びだらけの資本主義社会を繕いかに未成熟の近代社会を完成させるかが取り組むべき課題として考えられたのではないのでしょうか。

そのような問題意識を有したかと思われる一人に日本における西欧経済史研究で人間の内面

性を重視し先駆的業績を成した大塚久雄先生がいます。内村鑑三の薫陶を受けたキリスト者であった彼の『近代化の人間の基礎』（筑摩叢書、1968年）という著作にはそのような視点が貫かれています。敗戦後1年も経過せぬ1946年4月11日に書かれた「近代的人間類型の創出」という論文の中で彼は次のように述べています。

…こうした経済民主化の方向を推進するところの政治的主体が十全に形造られ得るためには、…民衆が——この民衆がという点になによりも重要である——広く近代的、民主的な人間類型に打ち出されていなければならないということである（傍点、筆者注。以下同じ）（12頁）。

経済の近代化を遂行するためには民衆の近代化が前提となるということでしょう。

わが国民衆の示しつつある人間類型は、…少なくとも近代「以前」的のものであるということは殆んど説明を要しないことであろう。……民衆は自らの人格的尊厳を内面的に自覚するに至らなければならない。そして近代「以前」的な自然法の如きを外側から与えられずとも、自ら自律的に前向きの社会の秩序を維持し、もって公共の福祉を促進してゆきうような「自由な民衆」とならねばならない。…「自由なる民衆」こそ近代生産力の決定的要因なのである。近代生産力それ自身である（13-15頁）。

近代的な生産力を十全に展開して行くために生産者たる民衆の内面的自覚の深化が不可欠であるということでしょうか。

この論文の1か月後の5月に書かれた「生産力における東洋と西洋」という文章の中で彼は次のように述べています。

なによりも必要なのは生産諸力の主体的要因たる勤労民衆（労働力）を、旧き段階の人間類型から真に近代的な生産力的な人間類型へと「教育し行く」——もとより最広義において——ことが第一の、最大の条件であろうと思う（216頁）。

資本主義的な生産を発展させるためには生産力の主体としての民衆を内側から変革して行かなければならないという同一の主張が展開されています。

更にその4か月後の9月に書かれた「魔術からの解放」という論文の中では次のように述べられています。

たとえば、あらゆる迫害と危険のうちにあってかの免罪符の販売を黙視しえなかったマルティン・ルッターの罪責感の深刻さと良心の鋭さ。…この「良心」の自覚による内面的意識の深化は、さらにジャン・カルヴァンの流れを汲むカルヴィニズムと、そしてバプティズムとの絡み合う禁欲的プロテスタンティズムの精神的雰囲気のうちに至ってついに徹底化される（93-94頁。—但し、管見によれば、キリストによる十字架上の贖罪以外に地上に罪を免れさせるものはあり得ないとするキリスト教では「免罪符」という名称は存在しません。石井祥裕「免罪符」によれば、「罪に対して課せられた有限な罪の免除を意味するものであるため、正確には『償罪符』と訳すべきもの」（研究社『新カトリック大事典』第4巻、982頁）です）。

内的我意識の深まりは禁欲的なプロテスタンティズムによって究極まで推し進められるということなのでしょうか。

要するに、「内面的エートス（人間類型）の民衆的確立」（「ロビンソン・クルーソーの人間類型」、1947年8月、80頁）のためにはキリスト教、とりわけ禁欲的なプロテスタンティズムが日本の社会に浸透して行くことが期待されるのでしょ。戦後間もない頃にはすでに資本主義社会は存在しています。しかし、生産力の主体としての民衆の意識は前近代的なものであり、それが生産力の拡大と発展にとって桎梏となっているという現実認識があり、それに基づいて民衆をキリスト教の中の禁欲的プロテスタンティズムに出会わせることによって、民衆の

中に近代的生産に適合する内的主体を確立させることが可能であり、またそれが必要であるとの沸沸たる思いを大塚久雄先生はお持ちであったのではないのでしょうか。しかし、戦後この方今に至るまで、禁欲的なプロテスタンティズムが日本の民衆の内的世界に広く深く受け容れられて行った、という形跡は見出し難いようです。そればかりか現状は世俗主義（secularism）が拡大と深化の一途を辿っています。

1868年の明治維新に遡りたいと思います。士農工商の身分制によって秩序づけられた封建的幕藩体制は幕を閉じました。新たに呱呱の声をあげた明治国家は四民平等の近代国家を目指すものでした。近代国家に生まれ変わるためには政治的には議会制民主主義を導入し、また経済的には大々的に機械制大工業を展開させて産業革命を遂行しなければなりません。明治初年にはこのいずれも無い状態でした。

議会制民主主義の導入も機械制大工業の展開もモデルは西洋にあり、西洋の人々の力を借りなければなりません。旧い体制は倒れたものの、新しい体制はまだこれから仕上げて行かなければならない状態でした。明治維新以後、日本には堰を切ったように西洋文明が入って来ました。それらを受け容れるにあたっては、自らをも変えなければなりませんでした。男は三百年この方近く頭の上に鎮座しましたちょんまげを切り、侍は袴袴を脱ぎ捨てて洋服に着替え、腰に差していた刀と別れ別れにならなければなりませんでした。大転換の幕開けでした。

これらの明治以降の大規模な西洋文明の流入よりも早くに幕末の1858年（安政5年）7月29日に日米通商条約第8条により居留地内での宣教の自由が認められ（教文館『日本キリスト教史年表』、29頁）、一定の空間的制限のもとに宣教師へボン等によって伝えられたキリスト教は、1873年（明治6年）2月24日にキリシタン禁制の高札が撤去されて（同年表、34頁）以後、公然と伝道活動が出来るようになりました。西洋文明の表層に浮き出、はたまた奥底に沈み込む

キリスト教は、西洋文明と一体の観があります。というのも、平等な社会を前提とする議会制民主主義の理念は、万人祭司主義のもとに議会制度における平等の教理を前面に押し出すところのキリスト教のプロテスタンティズムの見方と重なり合うものがあります。また機械制大工業の体系の中で働く労働者の職業倫理は、救済に関する予定の教理に立って信徒が恐れ戦きつつ労働に励むところのカルヴァニズムによって根柢づけられ得るものだからです。

ここに西洋文明の外皮だけではなく、内実をも進んで自らの中に取り込むことを通して日本の近代化を推し進め西洋に迫り着こうとする考え方が生じます。遅れて近代国家の仲間に入った日本が西洋との距離を縮めこれを零にするためには、目に見えるところの西洋文明の中の外在化されたものだけではなく、目に見えないところの内在化されたものをも併せて受容しなければならぬというものです。

果たして幕末から明治の草創期にかけてキリスト教と正面から向き合い、そのことを通して日本の近代化を考えようとした知識人がいました。森有礼や中村正直等がその人たちです。森有礼とキリスト教との関わりについては以前より些か興味を覚えるところでしたが、キリスト者としての中村正直については中国思想史研究の立場からの『『敬天愛人』の系譜』（『東洋文化』第4号、2009年）などの高論があらわれる野村純代先生の中村正直に関する研究を通して初めて多く学ばせていただくことが出来ました。記して感謝するものです。

中村正直（1832-1891）の伝記としては高橋昌郎先生による評伝『中村敬字』（吉川弘文館人物叢書、1966年第1版、1983年新装版）があります。それによれば、彼は幕末には「御儒者」として江戸幕府に仕え、維新後は明治政府から東京大学教授に任ぜられるなど、当時の日本の最高の知性の持ち主でした。彼は1874年（明治7年）12月25日に不惑を過ぎてカナダ・メソヂスト教会の宣教師コ克蘭より洗礼を受け（132

頁)、その翌年には1854年に中国で出版されたマーティン著『天道溯原』に訓点を施したものを世に出しています(136頁)。わたくしは早川勇先生の入手されたものを過日見させていただく恩恵に与ることが出来ました。

翻訳としてはJ.S. ミル『自由之理』(1872年)、スマイルズ『西国立志編』(1871年)が有名です。‘liberty’の訳語が「自由」に落ち着くのは中村の前者の訳本に負う所が大きいのではないのでしょうか。佐藤亨『幕末・明治初期漢語辞典』(明治書院、2007年)によれば、中村の訳語はロブシャイト『英華辞典』の記述に影響されているようです(400-401頁)。中村は後に『英華和訳辞典』(1879年)の校正者としてこの辞書に関わります。-この辞書は綺羅星の如き業績を残して世を去った那須雅之先生が監修者となって復刻版を大空社からお出しです。中村は「自由之理序」の中で、「窃ニセカに嘆ず、東洋諸邦の人民、往往にして神を知らず、而して唯務めて人と角う。故に人を愛するの心、毎に広からず深あそからず病うれう。」(近代日本思想体系『明治思想集I』(松本三之介編集、筑摩書房、1976年、39-40頁)と述べています。ミルの自由論の訳出もまた彼のキリスト教信仰に促される形でなされたと思えることは出来ないだろうかと思えるものです。

ただ、わたくしは彼のキリスト教信仰の真骨頂はスマイルズの『セルフ・ヘルプ』の翻訳『西国立志編』にあるように思います。同書は平川祐弘『天ハ自ら助クルモノヲ助ク』(名古屋大学出版会、2006年)によれば、それは「訳者中村の名声とそれにふさわしい文体の力もあいまって、明治時代を通して最大のベストセラーと化した。」(5頁)というものであり、明治の青年に偉大な感化力を及ぼしたようです。講談社学術文庫版に附された渡部昇一先生の「中村正直とサミュエル・スマイルズ」によれば、「それまでの伝記と言え、たいてい王様や将軍や貴族や文人のものであったが、スマイルズは主として、ふつうの市民で一業を成した人の伝記

を実証的に入念にえがくという分野を切りひらいた。」(講談社『西国立志編』、1991年、551-552頁)とあります。中村正直は無名の市民の生き方に価値を認めたのです。

明治維新により身分制は崩壊しました。身分ごとの道徳や倫理はその意味を失います。士、農、工、商の垣根を取り除いて新たに誕生させられた「国民」が共有する道徳や倫理が求められます。近代国家体系下で移転の自由を付与される農民は膨張する都市に吸い込まれ、工場の中で無名の市民として機械制大工業を支えます。近代的な生産の展開のためには近代の人間の内面が形成されなくてはなりません。というのも、彼らは議会制民主主義を機能させて行くために必要な選挙主体としても重要な存在として期待されるからです。

中村正直は英国人の自主自立の精神の背後に、『西国立志編』において「上帝」という語で登場するキリスト教の神への堅固な信仰があるのを見て取ったのではないのでしょうか。この神への信仰を支柱とする自主自立の精神こそ近代日本を建設する主体としての民衆に期待されるべきエートスとして彼の心を捉えずにはいなかったのではないかと思います。

夫レ富强ノ原ハ國ニ仁人勇士多キニ由ル。

仁人勇士多ク出ヅル所以之者ハ、教ヲ法ヲ信心望心愛心ニ由ルニ非ザル者莫シ。

(1871年明治4年「敬字先生上書是非」『思想篇』日本評論社『明治文化全集』第23巻、226頁)

中村正直は新しい明治国家の建設には新しい「国民」の創出を必要とする、それには「信心望心愛心」を生み出すところの大本の教えを「国民」と呼ばれるべき人々に説かねばならない、と考えたはずです。『西国立志編』はそのような教えを自らのエートスとした人々の格闘の物語です。彼はこれらの物語を通して若い人々の内側に「国民」としてのエートスが形造られるように祈る思いで『西国立志編』を訳出したのではないのでしょうか。ご教示を仰ぎます。